

ウル O-I 王朝 5 代の王墓と王妃墓

小野山 節

I ウル王室墓地と文献史料

— 最近四半世紀における史料の新発見 —

シュメール都市ウルにおいて、一般の墓とは違って多数の殉葬を伴う特殊な墓葬が発見されたのは 1927-29 年であった。発掘者ウーリー C. L. Woolley は、これらの特殊構造墓を 1928 年と 1929 年の発掘概報において Royal Tomb と発表した [Woolley 1929]、この Royal Tomb という認識に対して強い疑問と多くの反論が表明されたため、1934 年に刊行された報告書 *Royal Cemetery (Ur Excavations, Vol. 2)* では、疑問や反論の内容を細かく検討した上で、なお Royal Tomb と判断するのが妥当であることを改めて強調した。このことは一般向けに刊行された書物でも必ず取上げられている。都市ウル発掘の最初の概要 *Ur of the Chaldees: a Record of Seven Years of Excavation* (1929) でも、12 次にわたるウルの発掘を 1934 年に終えて 20 年後に出版された、名著の誉れ高い *Excavations at Ur: a Twelve Year's Work* (1954) においても、ウルの特異構造墓は Royal Tomb であることが力説されている。ウーリーは 1960 年に亡くなるまで、一貫して機会あるごとに王室墓説を主張し続けた。しかし、王室墓の発掘から 70 余年が経過した今日でも、王室墓説と問題の遺構を人間の死による墓ではなくて宗教的儀式の結果と考える見方との対立は、依然として解消されていない。

1980 年代は、王室墓説に対して宗教的儀式説がかなり優位に立っていたようである。王室墓説を主張し続けたウーリーの上記名著が、王室墓と認めないモーレー P. R. S. Moorey により「最新の内容に改訂されて」、*Ur 'of the Chaldees'* という書名で 1982 年に出版された (『カルデア人のウル』森岡妙子訳、みすず書房、1986 年)。こうなったのは多分、大英博物館とともにウルの発掘主体であった University of Pennsylvania Museum から刊行されている *Expedition* のウル王室墓発掘 50 周年記念特輯号 (第 20 巻第 1 号、1977 年) に、モーレーが新しい宗教的儀式説 'What do we know about the people buried in the Royal Cemetery?' を発表していたことによるのであろう。このモーレー論文は多くの研究者から注目された。古代メソポタミア史の概説書として 1964 年の初版から現在までなお多くの読者をもつ *Ancient Iraq* (Penguin Books) の著者ルー Georges Roux は、1985 年に 'La grand énigme du cimetière d'Ur?' と題する論文を *L'Histoire* に発表してモーレー論文を高く評価して「17 王室墓」という表現を用いた。宗教的儀式説が王室墓説に対して優

位にあるとみる傾向は1990年代にも引継がれている。

ところが1980年前後から、議論の対象となってきたウルの遺構が王室墓地であると証明することのできる重要な文献史料の存在が目ざされ始めた。ウーリーの提示した証拠によって、ウルの特殊構造墓を王墓 King's Tomb や王妃墓 Queen's Tomb と判断することは十分に可能だと私は考えるけれども、王室墓と認めない、というより王室墓と認めたくない研究者たちが、王室墓説に反対するそもその出発点は、王室墓の葬送に関する文献史料がシュメール語文献にないという認識にあった [小野山 1963]。その認識は誤りであることが分ってきた。葬送文書は存在していたけれども、当時のシュメール語に関する知識の制約から、文献学者はその内容を正しく読むことができなかつただけである。それにシュメール人の来世観に由来する偏見が加わって、ウル王室墓の理解を歪めてきたのであった。1970年代後半からおよそ四半世紀の間に行われた文献史料の新しい研究と新発見によって、それらの史料が目ざされるようになり、現在、王室墓葬送の文献史料による研究が軌道に乗りつつある。

これらの研究を参考にしながら、50年近く研究を続けてきたウル王室墓地に関する私の理解を再検討し、1999年3月から2001年12月まで前後5回のシュメール研究会において、その成果を次のような題目で発表した。

- (1) Ur 王墓地に第 I 王朝 Mesanepada 王の墓はあるか —— Ur O 王朝 5 代の王と王妃の墓を復原して ——
- (2) Ur 王墓地の墓の編年に Seriation Method は有効か : Pollock (1985) 論文の検討
- (3) Ur の RT 779 Meskalamdug 王墓の復原 : PG 755 の被葬者は王兜捧持人
- (4) メソポタミア初期王朝期のシュメール人墓地
- (5) 王、王妃の葬送と暗闇の灯火 —— 葬送文書と墓葬副葬品から ——

この論文は、私の1960-70年代におけるウル王室墓の研究成果に [小野山 1962, 1963, 1965, 1975]、この5回の発表のうち主として(1)と(3)と(5)の内容を加え、さらに研究発表後に明らかにすることのできた点を補足したものである¹⁾。

まずウル王室墓に関する従来の議論において、王室墓説に立つ研究者をも困惑させてきただけでなく、王室墓説に対する反論の糸口ともなってきた、黄金兜とメスカラムドゥグ銘の金製容器を伴う755号墓を779号王墓の構造のなかに正しく位置づけることから始める。次いで王墓と王妃墓の構造復原と王室墓地における配置ならびに王室墓の造営順を再論したうえで、最近明らかになったウル第 I 王朝と第 I 王朝以前の王室墓との関係を検討する。

なお、上記の発表においても、これまでに発表した論著でも、ウル王室墓地の問題を議論するとき、日本の従来の慣例にしたがって、とくに区別する必要のあるとき以外は、王の墓

1) シュメール研究会のメンバー、特に京都大学人文科学研究所の前川和也教授から文献資料ならびに現在の研究状況について多くの御教示をいただいた。深く感謝する。

と王妃の墓を区別せずに「王墓」と呼んできた。ここに至ってようやく、ウル王室墓地を正しく理解する上で両者を区別することが重要であると分かったので、今後は King's Tomb 王墓と Queen's Tomb 王妃墓とを区別し、Royal Tomb には王室墓、Royal Cemetery には王室墓地の訳語を用いる。そしてウルO王朝というのは、シュメール王朝表にウル第I王朝の創設者と記されているメスアンネパダ Mesanepada 王に先行する3王の系譜を指す便宜的な呼称である。王名の分る Meskalamdug と Akalamdug から、Kalam Dynasty と呼ばれることもある [Mallowan 1971]。

さて、ウル王室墓はシュメール史のなかでどの時代のものかという問題は、発掘当初から最も重要な問題の一つであった。先ず初めに誰もが考えたことはシュメール王朝表のウル第I王朝との関係であった [小野山 1965]。当時は、シュメール王朝表に示された王朝の順番をどこまで歴史的事実と認めうるかさえ殆んど検討されていない状態であったが、実際にウル王室墓をウル第I王朝のものとする見方も表明された。この問題に対してウーリーは発掘中に観察した第I王朝の遺物を含む層がウル王室墓の一群の上に認められたとして、王室墓をウル第I王朝以前に造営されたものと強く主張した。しかしこの時の発掘に参加していたマローワン Max E. L. Mallowan により、墓地全域を覆うとウーリーによって観察されたウル第I王朝期の層が確かなものでないとすると [Mallowan 1960]、ウル王室墓とウル第I王朝の王との関係は、従来の議論とは別の課題として検討しなければならない。

新史料からこのウル王室墓とウル第I王朝の関連問題に新しい展望を開いたのはベーゼ Johannes Boese であった [Boese 1978]。王室墓出土の銘文に見えるメスカラムドゥグ王はウル第I王朝の創設者メスアンネパダ王の父であるという。このことを記した王碑文は、1964年にマリで発掘された〈ウル遺宝〉に含まれる長さ11.8cmのラピスラズリ製七面大型管玉²⁾に刻まれたもので、ベーゼは〈ウル遺宝〉の報告書 [Parrot 1968] その他の読み方と違って、キシュの王メスカラムドゥグの息子でウル王メスアンネパダと読んだのである。ベーゼの読み方をまだ認めない研究者もいるが、その理由を明示したものではなく、近い将来にこのベーゼの読み方が定説となるであろう [Cooper 1986; Edzard 1993]。〈メスカラムドゥグ〉の銘文は、ウル王室墓地において755号墓と1054号王妃墓の出土品中に認められるので、この両墓がメスカラムドゥグ王と関係のあるものとする、メスカラムドゥグ王墓はウル王室墓地内に存在する筈であり、第I王朝メスアンネパダ王の墓もウル王室墓地内に存在する可能性がでてくる。この論文の表題にO-I王朝という表現を用いたのはこのことによる。なおメスカラムドゥグ王のもつキシュの王という称号は、その当時シュメール＝

2) この大型管玉は、1988年奈良において開催された「シルクロード・海の道」展で展示された。なおこの展覧会図録である菅谷文則・奥野義雄編『シルクロード・海の道』82図の写真は天地逆である。

アッカドにおいて覇権を掌握した王が用いたものである [Maeda 1981]。

葬送文書の発見という全く新しい展開は 1979 年に始まった。この年コペンハーゲンで開催された第 26 回国際アッシリア学会において、フォックスボグ Daniel A. Foxbog が都市アダブ Adab で記録された 1 個の土地売買文書を取上げ、シュメール人の葬送に必要な品目リストがそこに記されていると発表したのである [Foxbog 1980]。その品目のなかに車や奴隷がある。1980 年に刊行されたこのタブレットの読み方にはなお問題があるようで、シュタインケラー P. Steinkeller はかなりの行数について解読不能としたけれども [Gelb, Steinkeller & Whiting 1991]、他方で彼は都市ラガシュ Lagash 出土の DP 75 がアダブ文書と似た品目を列べていて、その品目にも橇や殉葬に関連すると見られる奴隷が含まれていることに注目している [Steinkeller 1980, 1990]。アダブ文書とラガシュ DP 75 文書は、ウル王室墓よりもやや時代が降るとはいえ、同じく初期王朝期の第Ⅲ期に属する史料である。すでに注目されているように、800 号プアビ Puabi 王妃墓で確認された橇による王妃の葬送は、タブレットの品目に橇が挙げられていることと符号する [Littauer & Crouwel 1990; Steinkeller 1990]。

シュメール人の葬送儀礼も、他の民族の場合と同じように、シュメール人の他界観念によって行われた筈である。だが 1930 年前後には、葬送儀礼や他界観念にたとえわずかでも触れた、ウル王室墓と同時代のシュメール語文献は全く知られていなかった。ウルの発掘に関与した研究者を除くと殆んど文献学者が王室墓説に反対する立場を採ったのは、このことと関連があるように思われる。ただ一人、文献学者ではクレマー S. N. Kramer だけが王室墓説に賛同してきた [Kramer 1963]。ウル王室墓より 500 年ほど後の史料だけでも、彼はニップール Nippur 出土のシュメール語で書かれた宗教的文書によってさまざまな主題をもつ神話や伝承の復原研究に従事するうちに、ギルガメシュ物語の一つとして、後に『ギルガメシュの死』と題された、その当時は欠損部分が多かった物語を発見してその英訳を刊行したとき、物語の欠損部分が発見されるとウル王室墓の発掘において示された状況を説明しうる文章をその中に見出しうるであろうと予測した [Kramer 1944, 1955]。さらにウル第Ⅲ王朝のウルナンム Ur-Nammu 王の葬送には戦車が用いられているのであるから [Flückiger-Hawker 1999]、この『ウルナンムの死』と対比すると、『ギルガメシュの死』の欠損部分からいっそう古い時代の車による王の葬送儀礼を知ることができるであろうと強調した [Kramer 1991]。最近デイヤラ Diyala 河上流にあるテル＝ハダッド Tell Haddad の発掘において、ニップール文書では分らなかった『ギルガメシュの死』の部分が発見されて、車による葬送と冥界に伴う多数の従者のことを述べた文章が明らかにされ、詳細は今後の研究に待たねばならないけれども、ウル王室墓地の状況にかなりよく符合することが分ってきたのである [Cavigneaux & Al-Rawi 2000; George 2000]。

ウル王室墓が発掘されたときから最近まで表明されてきた、王室墓であることを否定する根拠は全てなくなった。

II ウル王室墓地 755 号墓, 779 号墓, 1054 号墓の被葬者

— 王兜捧持人とメスカラムドゥグ王およびニンバンダ王妃 —

どのような視点から関心をもつにしても、ウル王室墓地とその出土品を問題にすると、恐らく誰もが先ず感じる疑問は755号墓の性格であろう。多くの世界史の叙述にシュメール文明を代表する遺物としてしばしば登場する黄金兜は、この755号墓から出土したものである。大量の副葬品のなかに金製ランプと金製鉢2個があり、これらに「良き国の英雄」を意味する「メスカラムドゥグ」の銘があることから、この兜もメスカラムドゥグの黄金兜と呼ばれている。隣接する1054号墓から出土した円筒印章にも同じ「メスカラムドゥグ」の銘が認められ、こちらには「王」の肩書が付けられている。金製品を含む大量の副葬品を伴うにも拘らず、発掘者ウーリーは755号墓をRoyal Tomb王室墓に入れなくてPrivate Grave通常墓に分類した。それは何故かと疑問を抱くのがむしろ当然であろう。そして、このことがウル王室墓地の特殊構造墓を王室墓と判断することに疑念をもたせ、引いては殆んど証拠のない宗教的儀式説へ多くの研究者を誘うことになる。格別に豊富な副葬品をもつこの755号墓の被葬者は屈強な男であるという形質人類学者キース Arthur Keith の人骨鑑定により、ウーリーはこの被葬者を1054号墓の円筒印章にある「メスカラムドゥグ王」とは同名異人のプリンスと推測した。755号墓の被葬者をめぐりこれまでの議論は殆んど進展することなく今日に至っている。最近では755号墓を王墓と認める見方も提出されている [Moorey 1977; Roaf 1990]。これは王墓か王墓でないのか。金器の銘は被葬者の名前ではないのか、被葬者の名前でないとしたら、その被葬者は一体何者だろうか。

755号墓の被葬者はメスカラムドゥグ王に仕える王兜捧持人であり [小野山 1975]、779号墓の被葬者がこの王で1054号墓の被葬者がその王妃であるのが私の見方である。こう考えて1054号墓と779号墓の構造を対応させて検討すると、755号墓の特異な点がよく理解できるのである。この解釈は、遺構や遺物の新しい発見によるものではなく、周知の副葬品とそれらの出土状態を新しい観点から検証して到達したものであるから、推測の過程を述べて証拠としたい。

先ずウーリーが王室墓地の墓葬を王室墓と通常墓に分類した基準を確認しておこう。埋葬形式を把握することのできる1,850基の大多数は、小さくて簡単な墓葬であった。それらは平均すると1.5m×9.7mの長方形堅壙にマットを敷き、装身具をつけた屍体をマットに包み、マット張棺、木棺、陶棺などに収めるか、あるいは直接に、1個のコップを持たせ、容器、利器、印章などの副葬品を棺の内にも外にもそえて葬ったものである。多数の通常墓に比べて16基の王室墓は、大きな墓壙を掘り、石灰岩か煉瓦で墓室を構築していて、金銀製品を含む豊富な副葬品を持っているだけでなく、多数の殉葬者を伴っている。王室墓という支配者の墓葬を考えるうえで、被葬者が殉葬者を伴っていることは通常墓と違う最も重要な要素である。755号墓には墓室も殉葬者も認められていない。

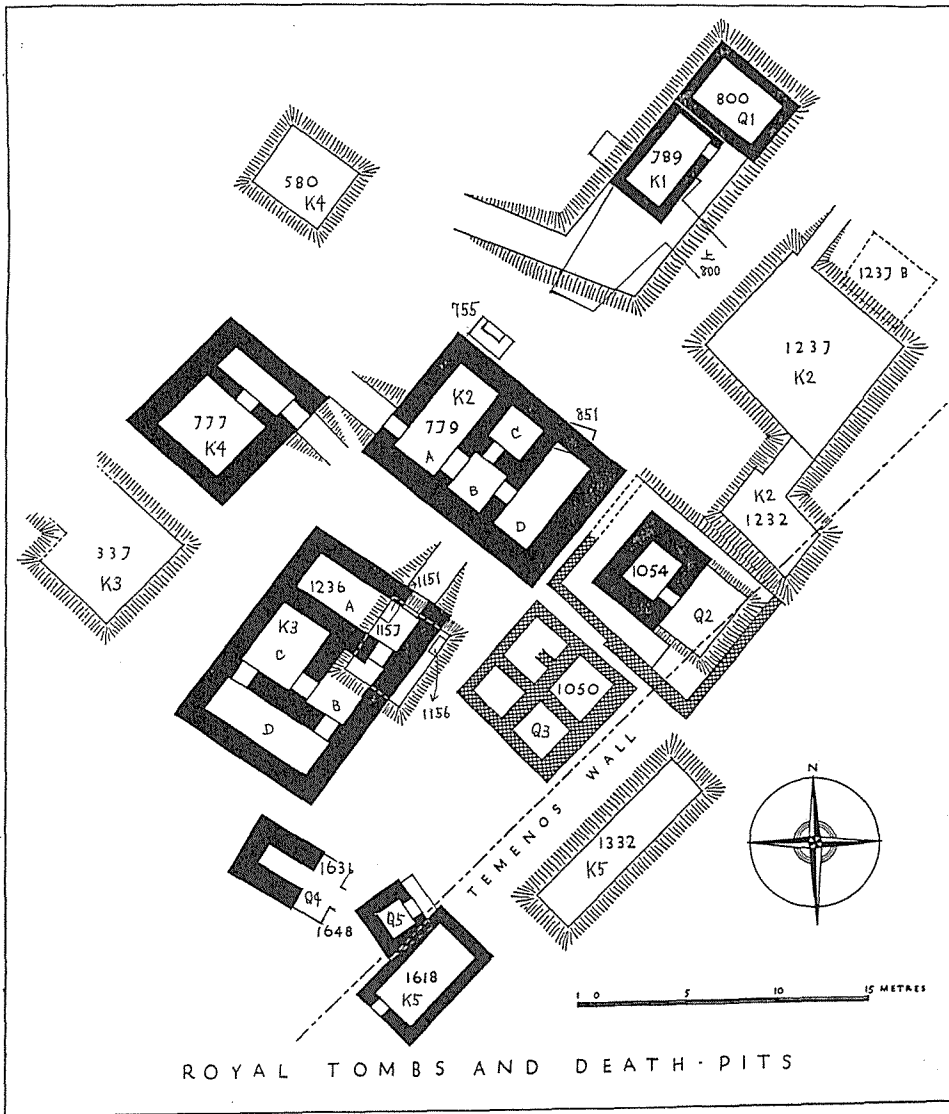


図1 ウル王室墓の配置 (Woolley 1934; Pl. 273 に加筆)

改めてウル王室墓の分布に注目してみよう (図1)。王室墓と認められた16基のなかで789号墓と800号墓が密接な関係にあって王墓と王妃墓と考えられることは、ウーリーが発掘以来とくに強調したところである。墓室の構造や埋葬の方式は少し違うけれども、779号墓と1054号墓および1618号墓と1648号墓の場合についても、1054号墓は779号墓の、1618号墓は1648号墓のそれぞれの存在を考慮して墓室が造営されているように見える。王室墓地の全体にわたるこの問題の検討は次章で行うことにして、ここで取上げようというのは、779号墓と1054号墓である。

盗掘を受けていない1054号墓は広さ10.7m×8.4m 深さ10.0mの墓壇とその底部全体に

つくられた墓室からなる。墓室には女性の遺骸を中心に殉葬者が認められたので、1054号墓は王妃墓と考えられている。墓室のうえを4mほど埋めもどしたのち練土壁で長方形構造をつくり、その中に殉葬と供物を繰返し行っている。その第9層と最上の第10層に副葬品を多く伴う殉葬墓がある(図2)。第9層に殉葬者Aを収めてのち、第10層の長方形空間を中央の仕切壁で2分し、東南室には木棺殉葬墓Bが、東北室の北隅にも2基の木棺殉葬墓があった。その2基と仕切壁の間に65cm×60cmの木箱があり、木箱には円筒印章をなかに2本の黄金短剣が並べられていた。円筒印章は両端にラピスラズリ製の鈕をつけた貝製で、「メスカラムドッグ王」の文字が刻まれていた。この1054号墓と779号墓の先後関係を細かく検討したニッセン H. J. Nissen によると、1054号墓は779号墓の後に造営されたものという [Nissen 1966]。

このような構造上の特徴と特異な出土品について、以下の議論に重要な意味をもつ点を確認しておく。1) 1054号墓は王妃墓であって、2) 779号墓の後に造営され、3) 墓壇内の上部に副葬品の多い、したがって高い身分にあったと見られる3基の木棺殉葬墓を伴い、4) 木棺殉葬墓を埋めるとき収められた木箱から「メスカラムドッグ王」銘をもつ円筒印章と黄金短剣2本が出土した。王名をもつ円筒印章の入った木箱が王妃墓に収められた事情を推測すると、その最も自然な解釈は、木箱に収められていた3点を夫であるメスカラムドッグ王の遺品と見ることであろう。メスカラムドッグ王は死に際し、黄金短剣2本と王銘入り円筒印章を形身として王妃に残した、その王妃が亡くなったとき、その形身を王妃埋葬の最後に墓に収めたということになるか。王妃の夫であるメスカラムドッグ王の墓を王室墓のなかで求めると、それは1054号王妃墓の西北に接する779号墓を借いて外に考えられない。

そこで次に検討しなければならないのは779号王墓の構造である。779号王墓は西北に壕道をもつかなり深い墓壇で、広さ12.0m×8.5mの底部に4室からなる墓室を構築したものである。墓室内部は盗掘されていたが、4室ともに殉葬者を収めた跡が認められ、D室からはいわゆるStandard旗章が出土している。同じ墓壇内で、墓室天井の上1.5m辺りに破壊された跡と見られる石灰岩と煉瓦の遺構があり、約4m上にあるのが755号墓と851号墓である(図1)。1054号王妃墓の構造に対比すると、この755号墓と851号墓は王妃墓の墓壇内第10層で認められた木棺殉葬墓に相当するものと理解することができる。このような墓壇内墓室上の木棺殉葬墓は、779号王墓と同じ規模の4室からなる墓室の1236号墓においても1151号墓の同類がある。1054号王妃墓と違うのは墓壇内上部に多数の殉葬が発見されていないことであるが、それは779号王墓が別に1237号死坑を伴っているからである。墓壇とは別に存在する死坑については次章で検討する。

問題の755号墓は、この番号を与えられた部分の構造から判断すると、2.5m×1.5mの長方形墓壇の長辺ぞいに、1.7m×0.7mの木棺を据えたごく一般的な大きさであって、遺骸は左を下にした緩やかな屈葬の姿勢で、特異な器物を含む金銀製の豊富な副葬品とともに

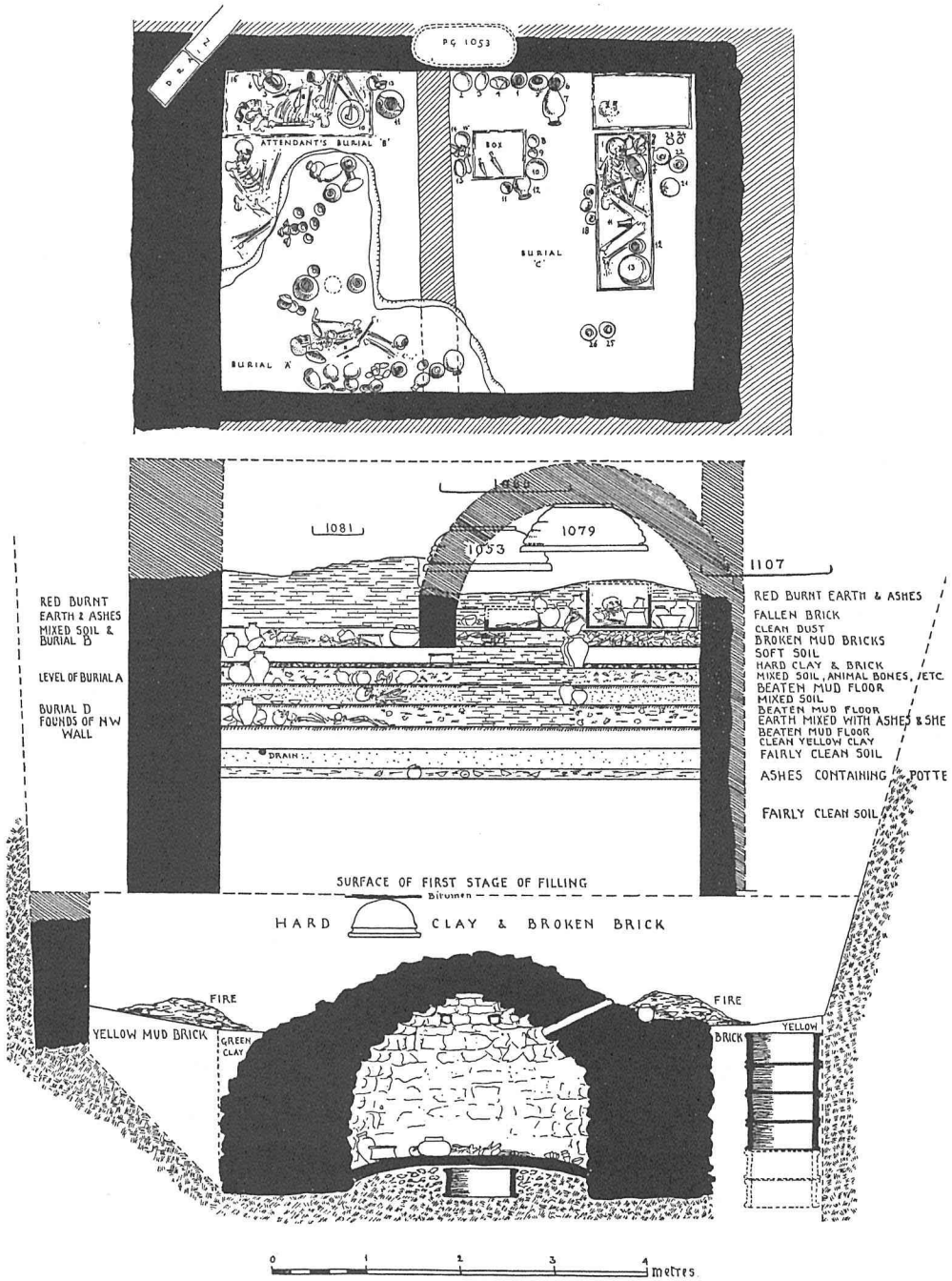


図2 ウル1054号王妃墓の断面図(下)と墓室上9・10層の平面図(上) [Woolley 1934: 99, 105]

収められていた(図3)。木棺の外の墓壇内にも金銀製品など大量の副葬品が収められていたが、この大きさからみても、779号王墓の墓壇内という位置からいっても(図1)、755号

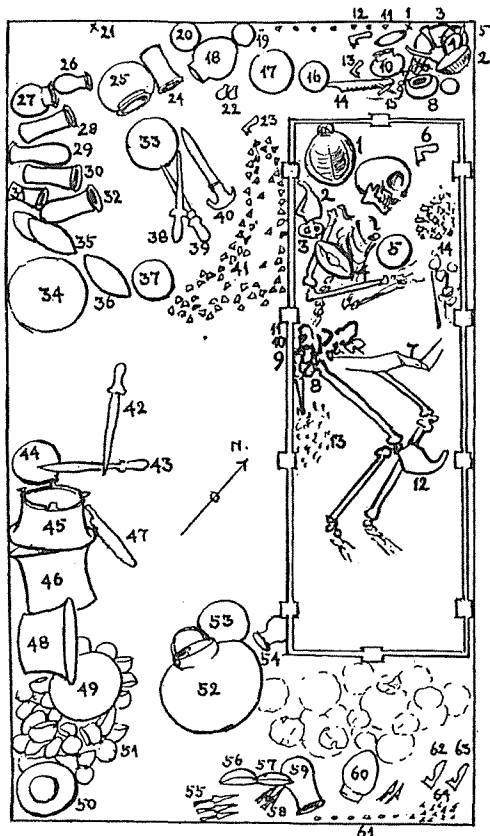


図3 ウル779号王墓の木棺殉葬755号墓平面図
(木棺の長さ1.7m) [Woolley 1934: Fig. 35]

墓は1054号王妃墓の第10層木棺殉葬墓に相当するものとするのが自然である。ニッセンは755号墓と851号墓の位置が779号墓の上にあるので、上層に埋葬されたもの、したがって779号王墓より新しい通常墓と判断したけれども、755号墓は779号墓の墓境内にあるというウーリーの記述は重要な証拠となるものであって、755号墓を独立した通常墓と認めるべきではない。さらに副葬品を1054号王妃墓の木棺殉葬墓と比べたとき、755号墓の方が格段に優品を多く持っているのは、779号王墓と1054号王妃墓の墓室規模の違いとも対応するものであって、王墓と王妃墓の差を示していると考えられる。755号墓に収められた木棺の内と外とで副葬品にどのような区別があったかは、比較する資料が殆んどないため現在のところは明らかにできないが、一般的に言って木棺内に重要品を収めたと推測しても決して不自然ではない。副葬品の全体にわたる詳細な検討は別の機会に譲り、これまでに議論の対象となった副葬品を挙げると、木棺内では黄金兜(1)、黄金ランプ(2)、琥珀金双斧(3)、黄金鉢(4)(5)、木棺外では銀製銅製鉢類約60個の一群(51)のうち銅鉢2個である。このうち「メスカラムドッグ」銘をもつのは、黄金ランプと黄金鉢の3個および銅鉢1個であり、もう1個の銅鉢に「ニンバンダ」銘が認められた。

黄金兜の副葬品をもつ殉葬者とはいかなる人物か——上のような副葬品と埋葬のあり方から推測すると、王の側において王権の象徴である双斧と兜を捧持する者 *Helmet-Bearer* ではないかということになる。戦場だけでなく宮廷内においても王を警護する役目を担っていたのであろう。755号墓の被葬者が屈強な骨格をもつ有能な男性であるという人骨鑑定も、この判断を支持しているように思われる。こう考えると、棺外の足下にあたる位置に積上げられた銅鉢類に「メスカラムドッグ」銘をもつものと「ニンバンダ」銘をもつものが含まれていたことも説明しやすい。これらは、王をまたときには王妃をも警護する王兜捧持人に対して、メスカラムドッグ王とニンバンダ王妃から何かの記念に贈られた下賜品ということになる。このことから1054号墓に埋葬された王妃の名をニンバンダと考定することができ

墓は1054号王妃墓の第10層木棺殉葬墓に相当するものとするのが自然である。ニッセンは755号墓と851号墓の位置が779号墓の上にあるので、上層に埋葬されたもの、したがって779号王墓より新しい通常墓と判断したけれども、755号墓は779号墓の墓境内にあるというウーリーの記述は重要な証拠となるものであって、755号墓を独立した通常墓と認めるべきではない。さらに副葬品を1054号王妃墓の木棺殉葬墓と比べたとき、755号墓の方が格段に優品を多く持っているのは、779号王墓と1054号王妃墓の墓室規模の違いとも対応するものであって、王墓と王妃墓の差を示していると考えられる。755号墓に収められた木棺の内と外とで副葬品にどのような区別があったかは、比較する資料が殆んどないため現在のところは明らかにできないが、一般的に言って木棺内に重要品を収めたと推測しても決して不自然で

る。そして王銘と王妃銘入りの鉢が銅製であって金製や銀製でないのは、王兜捧持人のシュメール社会における身分上のあり方と関連があるように思われる。この王兜捧持人は、またメスカラムドッグ王が暗闇の冥界に下るさいに飲食物を入れた黄金鉢(4)(5)をもち、黄金ランプ(2)に灯火をかざして先導する役目をも担っていたので、755号墓にはそれらも副葬品として収められたものと考えられる。

Ⅲ 王墓と王妃墓の構造復原

——墓壙と墓室と死坑の在方に3形式——

ウーリーがウル王室墓地における多数の墓葬のなかに認めた王室墓は16基であって、この'sixteen'という表現は彼が著作活動を終えるまで守られたけれども、報告書の王室墓に関する第IV章の記述は実質的に15基しかない。このような一貫性のない事態が生じたのは、1157号墓を王室墓に数えながらその記述を通常墓の第VI章に回したことにある。1157号墓に対する理解が十分でなかったからであろう。この点からも明らかなように、王室墓を研究するときはこの16基を固定的なものと考えないで王室墓の構造の一つ一つを細かく検討することから出発しなければならない。ところが報告書刊行以後の王室墓地研究では、王室墓の造営順を個々に確定してその結果を美術史や文献史に対応させることにもっぱら関心が向けられ、ウル王室墓16基という表現が繰返されてきた。欧米の研究者の間で、王室墓の構造を新しい視点から検討したのは、1977年に刊行された上述のモーレー論文からである。この論文の主旨は、従来とは異なる見方が示されているとはいっても宗教的儀式説であるので、始めに述べたように私には容認し難いものであるが〔小野山1963〕、遺構の分析と評価において2つの重要な点が新しく示されている。一つは前章で検討した755号墓について王室墓の資格をもつものと判断したことであり、もう一つは16王室墓がその構造から墓室をもつ10基と死坑の6基の2種に分けられると明示したことである。モーレー自身は755号墓をまだ王室墓の数に加えなかったが、彼の主張を高く評価したルーは、いわゆる16基に755号墓を加えてウル王室墓を17基と数えた〔Roux 1985〕。この数え方を採用する研究者も現われている〔Roaf 1999〕。

ここで問題になっている死坑は墓室のある10基の王室墓に附属したものであり、通常墓に分類されている墓葬のなかにも王室墓の一部と認めるべきもののあることを明らかにしたのが、1962年に発表した拙論「Mesopotamiaにおける帝王陵の成立」である。いま便宜上ニッセンの提案した符号RT (Royal Tomb) でもって王室墓またはその中心部を表し、ウーリーの使ったPG (Pit Grave) により通常墓と死坑を加えて、その時の私の判断を示すと、10王室墓は(1) RT 777 + PG 580, (2) RT 779 + PG 851 + PG 1232 + PG 1237, (3) RT 789, (4) RT 800, (5) RT 1050, (6) RT 1054, (7) RT 1236 + PG 1157 + PG 337, (8) RT 1618, (9) RT 1631, (10) RT 1648となる。この論文ではPG 1332の所属は不明のまま保留した。ウーリーはこれらの死坑6基について、それぞれの墓室が破壊

されたものと判断して、殆んど研究者もその見方を認めてきた。しかし、もしそれが実際に起ったことだとすると、破壊の跡を示す石灰岩や煉瓦の残骸がもっとはっきり残っている筈である。盗掘を受けていたRT 777, RT 779, RT 789, RT 1236, RT 1618, RT 1631, RT 1648の墓室の残存状況からみて、墓室の跡が殆んど残らないような盗掘を想定するのは不自然である。このような判断により王室墓10基の葬送方式を復原して、RT 789に代表される短期葬送様式とRT 1054に代表される長期葬送様式に分類した。そしてRT 779などの場合を両様式の間中型と理解し、ウル王室墓地は短期葬送様式から長期葬送様式に移行する、すなわち墓地は東北から西南へ移り、場所を少し変え、やがてウル第Ⅲ王朝における帝王陵の成立に至ることを明らかにした。

この度、上に述べたようにPG 755をRT 779に加えただけでなく、PG 513をRT 777の一部と見做し、前の論文では保留したPG 1332死坑をRT 1618に所属するものと考え、再び王室墓の構造を検討してみると、墓室と死坑だけの関係よりむしろ墓壙と墓室と死坑がどのような関係にあるかを問題にする方が、ウル王室墓地全体の特徴をよりよく把握することができるので、ウル王室墓の構造による分類をこの3要素の在方から3形式とすることに改めた。そうするとかつて設定せざるをえなかった中間形式は解消することができる。その3形式は以下の通りである。

[Ⅰ形式] 墓壙の底に墓室と死坑、代表例はRT 789で、王墓と王妃墓がある。

[Ⅱ形式] 墓壙の底に墓室、その上に高位殉葬墓を含む死坑、墓壙の外にも死坑、代表例はRT 779 + PG 755 + PG 851 + PG 1232 + PG 1237で、王墓の形式である。

[Ⅲ形式] 墓壙の底に墓室、その上に高位殉葬墓を含む死坑、代表例はRT 1054で、王妃墓の形式である。

ウル王室墓10基を一覧表にしたのが表1である。王室墓の造営順を細かく検討するためには、副葬品にみられる品目の変遷およびそれぞれの遺物の型式学的研究が必須だけれども、盗掘を受けた王室墓が多いため、葬送品目の変遷を議論することは不可能であり、実際に遺物を観察することができない限り副葬品の型式学的研究も大きな制約を受けるので、副葬品による検討は省かざるをえなかった。

被葬者の性別をみると、前章でその構造を細かく検討した1054号墓の被葬者は、遺存していた人骨から女性であることが分っている。1054号王妃墓の779号王墓に対する位置と779号王墓の755号木棺殉葬墓から出土した副葬品の銘文とによって、1054号墓は王妃ニンバンダを埋葬したものと推定することができた。王室墓の被葬者のなかで、この1054号王妃墓の外に被葬者の性別が判明しているのは、800号墓と1618号墓と1648号墓の3基である。1618号墓は男性、800号墓と1648号墓が女性であるから、1054号王妃墓を加えると、被葬者の人骨から判断して王妃墓は少なくとも3基あったことが確実である。この外に1050号墓も、人骨による男女の判別はできなかったが、王妃墓の可能性が極めて高い。

1050号墓は特異な点の多い王妃墓である。墓室はなかったけれども、墓壙の上部を練土

表1 ウル王室墓復原10基一覧

RT 番号	被葬者 の性別	墓室の 部屋数	墓室内 の殉葬者	死坑の位置・殉葬者・車等				形式	
				城底・城道	墓室の上か下	木棺殉葬者	外車死坑・車か櫓		
1	777	2	○	○		PG 513	PG580	車	II
2	779	4	○	○		PG 755 PG 851	PG1232 PG1237(74)	車	II
3	789	1	○	64	○			車	I
4	800	♀	1	○	25	○		櫓	I
5	1050	(♀)		40		○			III
6	1054	♀	1	○		○	Burial B Burial C		III
7	1236		4	○		PG1157(58)	PG 1151 PG 1156	PG337	II
8	1618	♂	1	○				PG1332(28)	(II)
9	1631		1						(III)
10	1648	♀	1	○					(III)

壁で4分し、死坑を伴っていることから王室墓の資格が与えられてきた。墓壙の底に40体の死坑をおき、その上に厚い練土床をつくっていた。この練土床の上に築造されていた墓室が破壊されてしまったとウーリーは判断したけれども、練土床の中央に置かれた副葬品や墓壙上部の殉葬と埋土の状況からみて、恐らく墓室は造られなかったものとする。この副葬品のなかから発見されたのが、「アカラムドゥグ、ウル王、アシュシキルディギル、彼の妻」の銘をもつラピスラズリ製大型円筒印章である。墓壙の壁面中段に葦棺があるが、1050号墓に伴うものかどうかは不明。墓壙の上部に4部屋をつくって殉葬と供献を繰返し行っている。円筒印章の銘文にウル王アカラムドゥグの妻とあること、いくつかの相違点があるとはいえ、墓壙全体の構成は1054号王妃墓に類似すること、さらに1054号王妃墓に対して779号王墓が存在するのと同じ関係で1050号墓に対して1236号墓があり、しかもこの1236号墓は779号王墓と同じ4室構成の墓室をもっていることから判断して、この1050号墓は確実に王妃墓と認めることができる。その上アシュシキルディギルという名前まで分る王妃の墓である [Sollberger 1960]。それでは1050号王妃墓は、他の王妃墓と同じように墓室をなぜ造らなかったかという疑問が残るけれども、現在のところ、アシュシキルディギル王妃の身分の低い出自と関連があるのではないかと推測している。

こうして1050号王妃墓を加えると、確実な王妃墓は全部で4基となり、4基のうち1054号王妃墓と1050号王妃墓がⅢ形式である。ウル王室墓地の王室墓10基のうち4基が確実に王妃墓だとすると、もともと王妃墓は5基あったのではないかと、王室墓10基というのは王妃墓5基、王墓5基からなる、すなわち5代の王と王妃の墓地ではないかという想定も可能

である。このような観点から墓地における王墓と王妃墓の配置をみると、王墓と王妃墓が対として造営された8基を認めることができる。それらは、いずれもI形式に分類される789号王墓と800号王妃墓、II形式の779号王墓とIII形式の1054号王妃墓、II形式の1236号王墓とIII形式の1050号王妃墓であり、両墓とも構成の一部を簡略化したII形式の1618号王墓とIII形式の1648号王妃墓である。残った2基777号墓と1631号墓はどう見ることができるか。この問題は、ウル王室墓地の中でそれぞれの王墓と王妃墓がどのような順序で造営されたかを検討するなかで考察する。

IV ウル王室墓地における王墓王妃墓の相対年代

— 造営順〈東北から西南〉にみられる王室墓の発達と衰退 —

古い墓地が発掘されて、個々の墓葬に被葬者名や紀年銘を示す史料が伴わないとき、最初に取り組むべき最も重要な課題が、墓葬の形式と副葬品によるそれぞれの墓葬と墓地の年代考定にあることは議論の余地がない。ウル王室墓の発掘において銘文をもつ若干の遺物が発見されたとはいえ、ウル第I王朝以前とする「層位的事実」が優先され、銘文も文献史と係りをもつものが無かったので状況は全く同じであった。したがって王室墓の年代を決めるには、先ず王室墓の相対年代を明らかにし、次いで絶対年代、言い換えると暦年代の決定へ進まなければならないことも、当然の手続きであった。

ウル王室墓16基の相対年代について、ウーリーは王室墓地の西南部に造られたものが古く東北部にあるものが新しい、すなわち王室墓は墓地の西南から東北へ順番に造営されたものと考えた。その主要な根拠は王室墓の墓室天井にみられる架構法の発達であって、1236号墓のA室とD室の天井に用いられた持送りアーチ形 Corbell Vault が古く、789号墓の墓室天井に使われている真正アーチ形 Barrel Vault が新しいという判断であった。この編年基準は、1236号墓のB室とC室に真正アーチ形天井が認められるので絶対的なものではないと、ウーリー自身が許りながらも、1236号墓から789号墓への順序を想定すると、天井架構法の外にも墓室構築の材料が石から煉瓦に代ることや墓室の壁面装飾も漆喰から泥になることにも対応すると明言して、1236号墓が古く789号墓が新しいと主張した。欧米の研究者はウーリー編年の大枠を妥当なものと認めて、もっぱら個々の王室墓の前後関係を確定することに努めてきた。細部にわたってそれらの試みを紹介する余裕はなく、また決して成功しているとは認められないので、ニッセンとポロックの結論だけを示すと、図4と図5のようになる。ニッセンは1236号墓と1648号墓が最も古く、1050号墓と1237号墓が最も新しいとみる [Nissen 1966]。図4と比べやすくするため、上下に時間軸をとる原図を左右の時間軸にかえてポロックの結論を示した図5では、1050号墓が最も古くて800号墓が最も新しい時期に置かれている [Pollock 1985]。1332号墓の矢印は、それより狭い範囲に年代を限定できないことを表している。両者の判断に違いはあるが、大筋として王室墓地では西南から東北へ王室墓の造営が行われたと、ウーリーと大体同じように考えている。

う一つの1631号墓は6.0 m×3.5 mの墓壇の一部を前庭部にして、コの字形の墓室を築いたもので、北東壁にそって男性の1遺体が発見された。しかしこれも盗掘を受けているので、他の証拠がない限り、この男性遺体によって1631号墓を王墓と断定することはできない。むしろ墓室の構造からみて、前庭をもつ単室墓の1054号王妃墓や1648号王妃墓と同じであるから、1631号墓は王妃墓の系譜に入れるのが自然である。

こうして777号墓が580号車坑を伴う王墓であり、1631号墓は王妃墓であることが認められると、ウル王室墓地では、大体において墓地の西北部を王墓が占め、東南部に王妃墓が営まれたものと判断することができる。特異な在方を示すのは墓地の東北端にある800号王妃墓と779号王墓に附属する1237号死坑および1232号車坑、それに西南端の1618号王墓である。この特異な在方は、ウル王室墓地の王墓と王妃墓が構造的にみて発達と衰退の形相を示していることに因ると見ることができる。

ウル王室墓地は東北部の789号王墓に始まる。ウーリーが強調したように、789号王墓に密着させて800号王妃墓は墓室を王墓の東北横に、死坑を789号王墓の真上に重ねて置いたために、800号王妃墓の墓室がウル王室墓地の東北端にできることになった(図1)。789号王墓も800号王妃墓も単室の墓室である。次の779号王墓は789号王墓の西南に4室をもつ大きな墓室が、789号王墓の東南に広大な面積をとって1237号死坑と1232号車坑がつくられた。盗掘を免れたため黄金兜を始め多数の金銀製品を伴って発見された755号木棺殉葬墓から推測すると、779号王墓の埋葬時における豪華な状況は想像を遥かに起えるものがある。779号王墓の被葬者は権力を増大させて4室からなる立派な墓室をつくり、多数の殉葬者を伴って大規模な葬送を行ったのである。1054号王妃墓は779号王墓と並べて王墓の東南につくられた。この時点で王室墓地の西北部に王墓を、東南部に王妃墓をつくる伝統が生じたと考えられる。それ以降3代の王妃墓はこの伝統を守っている。次の1236号王墓は779号王墓の墓室と同じく4室で779号王墓の東南に一回り大きくつくられたが、1054号王妃墓で始まった墓壇内墓室上死坑の方式が一部に採用されて、墓室上に1157号死坑を設け、外の337号死坑はかなり縮小してつくられた。1050号王妃墓は1054号王妃墓の西南側に1236号王墓と並べてつくられた。編年的にみると次にくる777号王墓と1631号王妃墓だけが一對として並べて造られていないがその事情は次章で触れることにして、両者とも墓室の規模が急速に縮小していることに注目する必要がある。最終段階である1618号王墓と1648号王妃墓は墓地の西南部に小規模な墓室しか造営することができなかった。このことは王権の衰退と関連する現象である。そして上で指摘したように1618号王墓が王妃墓群の区域につくられた特異な事情と、この王墓をウル王室墓のなかで最も新しいと考える根拠を示しておかねばならない。

1618号王墓が王墓区域とは違う、むしろ王妃墓区域につくられたのは、先に埋葬された1648号王妃墓の存在に引寄せられたものであろう。1648号王妃墓の被葬者は20歳ばかりの女性であるから、若くして死亡した王妃の墓と一部を重ねる位置に1648号王墓は墓室がつ

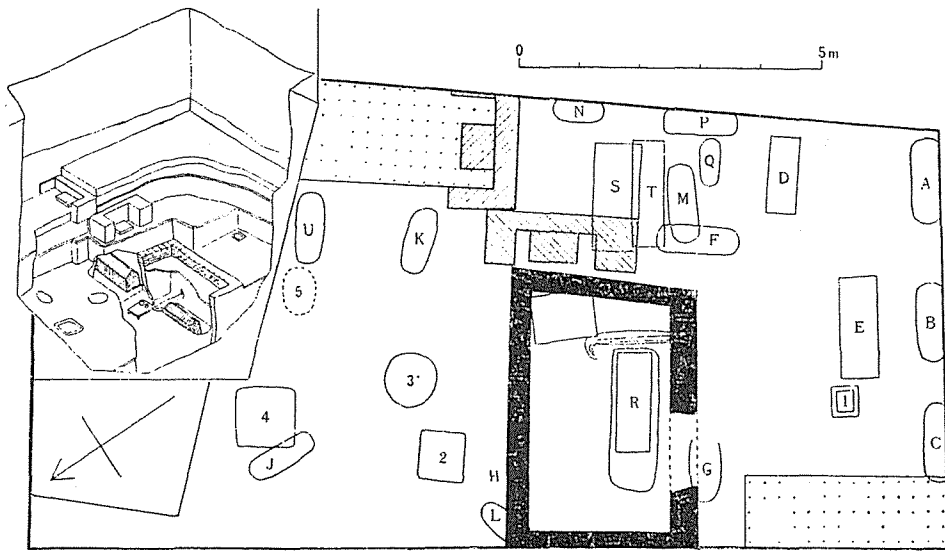


図6 ウル1847号墓 [小野山1962:第4図]

くられ、王墓の埋葬方式として守らなければならない1332号死坑が側に置かれたものと考えられる。この1618号王墓はそれ以前の王墓の墓室には認められない特異な構造である。この王墓は墓室がつくられていない。その構造は、長方形小坑の半分を占める頑丈につくられた木棺に被葬者の男性を収め、他の半分に4体の殉葬者を伴い、長方形小坑の底面から1.7m上に、4.5m×3.8mの広さの、高さ1.0mの泥煉瓦づくり囲壁をもつ。被葬者を収めた場所の上に囲壁を設ける構造は(図6)、ウーリーによって年代を仮りに「ウル第II王朝期」とされた1847号墓にも認められるのである[小野山1962]。「ウル第II王朝期」埋葬の年代については、アッカド王朝後からウル第III王朝時代初期まで降るという意見もある。この年代観が妥当かどうかは別に検討しなければならない課題であるが、1847号墓の一群はウル王室墓より新しいと見ることに異論が提出されたことはない。ウル王室墓のなかで1618号王墓だけに見られる構造上の特徴が、時代の降る1847号墓にもあるとすると、1618号王墓はウル王室墓地のなかで最も新しい王墓と考えるのが自然である。

V 王墓と王妃墓からみたウルO-I王朝の盛衰

— シュメール王朝表のウル第I王朝との関連 —

5代の王墓と王妃墓に当るウル王室墓10基は、構造上からみて発達から衰退へと推移することが認められた。王陵研究の一般論からいうと、王墓や王妃墓の在方はそれぞれの被葬者たちが生前に行使することのできた権力の強弱と深く係わっており、特に王墓の発達と衰退は王権の伸長と衰微に連動しているように見える。ウル王室墓地に葬られた王の権力の強さがどのように推移したかを跡づけるために、5基の王墓の被葬者にK1, K2, K3, K4, K5

の符号を、同じく5基の王妃墓の被葬者にQ1, Q2, Q3, Q4, Q5の符号をつけ、前章において検討した王墓と王妃墓の造営順を想定すると、一对の王墓と王妃墓では墓室遺構の上下関係からQ5→K5と分る外は王妃墓の造営が王墓のそれに先行するという証拠がないので、K1→Q1→K2→Q2→K3→Q3→K4→Q4→Q5→K5ということになる。王権の問題を考えるときには、文字資料があれば、それがいかに少くとも可能な限り取込んで検討することが重要である。10基の王墓と王妃墓のなかで副葬品の銘文から被葬者名を並べ、王室墓の出土品から直接の証拠はえられないにしても、他の王碑文に示された王名から復原することのできる系譜によって可能性の高い被葬者を推測し、これらには括弧を付けて示すと次のようになる。

[RT 789]	K 1 不 明	Q 1 Puabi [RT 800]
[RT 779, PG 755, PG 851, PG 1232, PG 1237]	K 2 Meskalamdug	Q 2 Ninbanda [RT 1054]
[RT 1236, PG 1157, PG 1151, PG 1156, PG 337]	K 3 Akalamdug	Q 3 Ashusikildigir [RT 1050]
[RT 777, PG 513, PG 580]	K 4 (Mesanepada)	Q 4 (Ninbanda) [RT 1631]
[RT 1618, PG 1332]	K 5 (Aanepada)	Q 5 不 明 [RT 1648]

すなわち、王の系譜はK1→K2メスカラムドゥグ王→K3アカラムドゥグ王→K4(メスアンネパダ王)→K5(アアンネパダ王)と復原することができる。

王の系譜について、K1=789号墓の被葬者はかつてアバルギ Abargi と考えられたが、現在では否定されていて、残念ながら不明のままである。K2すなわち779号王墓の被葬者をメスカラムドゥグ王と考定したのは、Q2の1054号王妃墓から出土した円筒印章の王碑文と779号王墓の木棺殉葬755号墓から出土した金製のランプと鉢2個および銅製の容器に認められた銘文によるものである。1236号王墓に被葬者名を決める直接の証拠はないにも拘らず、K3すなわち1236号王墓の被葬者をアカラムドゥグ王と推定したのは、K3の対となるQ3の1050号王妃墓から発見されたラピスラズリ製大型円筒印章の王碑文に「ウルの王アカラムドゥグ」とあることによるのであって、以上の考定は殆んど確実であろう。そしてメスカラムドゥグ王からアカラムドゥグ王へと王の系譜をたどりうることは、王碑文の研究では定説である [Sollberger 1960; Cooper 1986]。この順番は、ウル王室墓地における王墓の造営を墓地の東北から西南方向へ移行した、すなわち779号王墓→1236号王墓と判断した私の想定と一致する [小野山 1962]。K4としてメスアンネパダ王の推定を可能にしているのは、始めに述べたマリ出土〈ウル遺宝〉のラピスラズリ製大型管玉の銘文であり、K5の被葬者をアアンネパダ王と考えるのはウバイド al-Ubaid において発掘されたニンフルサグ Ninkhursag 神殿の大理石製定礎板の王碑文によるもので、K4王墓にもK5王墓にもその証拠はない。王墓の編年に王の系譜を対応させた一つの試みである。そしてQ4=1631号王妃墓の被葬者をニンバンダと推定するのも、ウル王室墓地から発掘中に採集され

た遺構の明らかでない出土品のラピスラズリ製円筒印章 (u. 8981) に「王妃ニンバンダ、メスアンネバダの妻」と刻まれていることによるものであって、1631号王妃墓の出土品に証拠がある訳ではない。

王墓の造営順を考察した前章の成果とここに述べた被葬者である王の想定が妥当なものだとすると、ウル王室墓地では王墓と王妃墓が一对であることを意識して造営されたという通例に反するかのような位置にあるのが、K4メスアンネバダ王墓とQ4ニンバンダ王妃墓である。他の4対の王墓王妃墓と違って、この両墓は互いにかなり離れている。メスアンネバダ王は直線距離にしておよそ650kmほども西北にあるマリのような遠隔地まで遠征しているから、遠征のため宮廷を留守にすることが多かったに違いない。そのため、臆測に過ぎないけれども、王と王妃の仲が良くなかったことによる可能性もある。

もっと重要なことは、779号王墓をメスカラムドゥグ王の墓と確実に同定することができたことである。葬送に関連する遺構の全体を復原すると、第Ⅱ章で述べたようにメスカラムドゥグ王墓は、4室からなる大きな779号墓室をつくり、その墓壙上部には豪華な金銀製品を含む多数の副葬品を収めた755号と851号の木棺殉葬墓を伴い、1232号車坑と74体の殉葬者が発掘された1237号死坑もその一部を構成するという、ウル王室墓地のなかでは最大規模のものであった。先代の王K1の789号王墓が墓壙の一隅に単室の墓室をつくり、墓壙底の他の部分を死坑としたものであったのに比べて、K2メスカラムドゥグ王墓は格段に大きな規模に造られている。メスカラムドゥグ王は急速に権力を強化し周辺地域へも支配を拡大していったものと推測される。王を安置したとみられる墓室の奥室からスタンダード(旗章)が発見されたことも、この活動的な王にふさわしい副葬品と思われる。

雌雄一對の山羊のモザイクが発掘されたのもこのメスカラムドゥグ王墓の1237号死坑であった。発見以来すでに70余年が過ぎたにも拘らず、この奇抜な造形品の性格はいまだに分っていない。これが雌雄一對の像として製作されたものであることは確実であるから、豊饒の祈願と関係のある造形品であることは明らかである。この雌雄山羊一對の性格については、別稿を立てて検討しなければならない課題であるが、私はエジプト古王国の壁画を参考にして[名古屋ボストン美術館 2001; 図36]、エジプト伝来の習俗ではないかと考えている。先代のQ1プアビ王妃墓からはエジプト起源の楽器シストラム(がらがら)が出土しており[小野山 1997]、シュメール彫刻にもメソポタミア初期王朝Ⅱ期からⅢ期にかけてエジプトの影響が認められるので[小野山 1996]、メスカラムドゥグ王は外来文化、特にエジプト文化を積極的に取り入れて国力の充実を図ったのではないかと推測される。当時のエジプトは第Ⅲ王朝の支配下にあり、ピラミッドが巨大になりつつあった。マリ出土の〈ウル遺室〉の大型管玉に見られるように、メスカラムドゥグ王が「キシユの王」という称号を持っている[Maeda 1981]のはその事の証である。だが、このメスカラムドゥグ王はシュメール王朝表に王として記録されていない。

ここで改めて疑問に思うのは、シュメール王朝表に記し留められたウル第Ⅰ王朝4人の王、

(1) メスアンネパダ (王位 80 年), (2) メスキアグナンナ Meskiagnanna (36 年), (3) エルル Elulu (25 年), (4) バルル Balulu (36 年) は [Jacobsen 1939], どのようにして選ばれたかという問題である。ウバイドのニンフルサグ神殿の定礎板が発見されたとき、この神殿の建設者であるアアンネパダ王の名がシュメール王朝表のウル第 I 王朝の王名にないのは、名前がメスアンネパダによく似ているため伝承の過程で書き落されたことによるのであって、メスアンネパダの在位 80 年というのはメスアンネパダ王とアアンネパダ王 2 人の王の在位年数であると説明され [Hall & Woolley 1927], 現在ではこの考え方が定説となっている。ウル王室墓の発達と衰退の状況から判断すると、K 5 王墓の段階で一つの区切りがあるように思われる。K 5 王墓の被葬者をアアンネパダと推定するのが妥当だとしたら、シュメール王朝表に記されたウル第 I 王朝のメスアンネパダ王の後継者たちをどう考えたら良いか、もっと重要なことはメスアンネパダ王以前の 3 人の王をどのように位置づけるとシュメール史をより深く理解することができるかである。文献史の研究者に大きな期待を寄せている。

参考文献

- Alster, Bendt (ed.) (1980) *Death in Mesopotamia. Mesopotamia 8.*
- Boese, Johannes (1978) Mesanepada und der Schatz von Mari. *ZA* 68.
- Cavigneaux, Antoine & Farouk N. H. Al-Rawi (2000) *Gilgamesh et la Mort, Textes de Tell Haddad VI.*
- Cooper, Jerrold S. (1986) *Presargonic Inscriptions. Sumerian and Akkadian Royal Inscriptions* vol. I. New Haven.
- Edzard, D. O., Mes-kalam-dug (1993) *Reallexikon der Assyriologie und vorderasiatischen Archäologie.* Bd. 8, 1./2. Lieferung.
- Flückiger-Hawker, Esther (1999) *Urnamma of Ur in Sumerian Literary Tradition. Orbis Biblicus et Orientalis* 166, Freiburg Schweiz.
- Foxvog, Daniel A. (1980) Funerary Furnishings in an Early Sumerian Text from Adab. *Mesopotamia 8.*
- Gelb, Ignace J., P. Steinkeller & Robert M. Whiting Jr. (1989-1991) *Earliest Land Tenure System in the Near East: Ancient Kudurrus. OIP* 104, Plates (1989) and Text (1991).
- George, Andrew (2000) *The Epic of Gilgamesh.* Penguin Classics.
- Hall, H. R. H. & C. L. Woolley (1927) *Al-'Ubaid. Ur Excavations* 1. Oxford.
- Jacobsen, Thorkild (1939) *The Sumerian King List.* Assyriological Studies 11. Chicago.
- Kramer, S. N. (1944) The Death of Gilgamesh. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 94.
- Kramer, S. N. (1955) The Death of Gilgamesh. In: *Ancient Near Eastern Texts Relating to the*

Old Testament (2nd ed.)

- Kramer, S. N. (1963) *The Sumerians: their History, Culture, and Character*. Chicago.
- Kramer, S. N. (1991) The Death of Ur-Nammu. In: *Near Eastern Studies: Dedicated to H. I. H. Prince Tahahito Mikasa on the Occasion of His Seventy-Fifth Birthday*, ed. Masao Mori, Hideo Ogawa & Mamoru Yoshikawa. Wiesbaden.
- Littauer, M. A. & J. H. Crouwel (1990) Ceremonial Threshing in the Ancient Near East, I. Archaeological Evidence. *Iraq* 52.
- Maeda, Tohru (1981) "King of Kish" in Pre-Sargonic Sumer. *Orient* 17.
- Mallowan, M. E. L. (1960) Memoires of Ur. *Iraq* 22.
- Mallowan, Max E. L. (1971) The Early Dynastic Period in Mesopotamia. *The Cambridge Ancient History*, vol. I, part 2. Cambridge.
- Moorey, P. R. S. (1977) What do We Know about the People Buried in the Royal Cemetery of Ur? *Expedition* 20.
- Moorey, P. R. S. & C. L. Woolley (1982) *Ur 'of the Chaldees'. the final account, Excavations at Ur*, revised and updated, London.
- 名古屋ボストン美術館編 (2001) 『ピラミッドの時代』名古屋.
- Nissen, H. J. (1966) *Zur Datierung des Königsfriedhofes von Ur*. Bonn.
- 小野山節 (1962) Mesopotamia における帝王陵の成立『西南アジア研究』8.
- 小野山節 (1963) Ur「王墓」の被葬者は王か、聖なる結婚の主演者か『西南アジア研究』10.
- 小野山節 (1965) Urの王墓はUr第一王朝のものか『オリエント』8(1).
- 小野山節 (1975) メソポタミアの美術——紀元前6千～前2千年紀——・図版解説 新規矩男(編)『大系世界の美術 2 古代西アジア美術』学習研究社.
- 小野山節 (1996) メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像——そのエジプト的要素——『西南アジア研究』44.
- 小野山節 (1997) メソポタミアとエジプト——紀元前三千年紀の交流とジルベール説の当否——『西南アジア研究』47.
- Parrot, André (1968) *Le Trésor d'Ur. Mission Archéologique de Mari IV*. Paris.
- Pollock, Susan (1985) Chronology of the Royal Cemetery of Ur. *Iraq* 47.
- Pollock, Susan (1991) Of Priestesses, Princes and Poor Relations: The Dead in the Royal Cemetery of Ur. *Cambridge Archaeological Journal* 1 (2).
- Roaf, Michael (1990) *Cultural Atlas of Mesopotamia and the Near East*. Oxford.
- Roux, Georges (1985) La grande énigme du cimetière d'Ur. *L'Histoire* 75.
- Roux, Georges (1992) *Ancient Iraq*, 3rd ed. London.
- Sollberger, Edmond (1960) Notes on the Early Inscriptions from Ur and El-'Obêd. *Iraq* 22.
- Steinkeller, P., (1980) Early Dynastic Burial Offerings in the Light of Textual Evidence (unpublished). 190th Meeting of the American Oriental Society, San Francisco, April 1980. [Pollock 1991: 187–188].

- Steinkeller, P. (1990) Ceremonial Threshing in the Ancient Near East, II. Threshing Implements in Ancient Mesopotamia: Cuneiform Source. *Iraq* 52.
- Woolley, C. L. (1929) Excavation at Ur, 1928 ~9. *Antiquaries Journal* 9(4).
- Woolley, C. L. (1934) *The Royal Cemetery. Ur Excavations* 2. London.
- Woolley, C. L. (1954) *Excavations at Ur*. London.

(京都大学)